

看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティの形成に関する研究

—基礎看護学実習Ⅰ，基礎看護学実習Ⅱおよびボランティア活動経験との関連—

小沢久美子 久保宣子 下川原久子 古舘美喜子 日當ひとみ

清塚智明 切明美保子 蛭田由美

要旨

本研究は、看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティにおける基礎看護学実習Ⅰ，基礎看護学実習Ⅱ，ボランティア活動経験との関連を明らかにすることを目的に看護学科学学生 62 名に質問紙調査を行った。その結果、基礎看護学実習Ⅰ前より後では職業的アイデンティティの「必要とされることへの自負」において有意に得点が高く、1 年次より 2 年次では「看護観の確立」「必要とされることへの自負」において有意に得点が低かった。また 2 年次におけるボランティア活動経験は社会的スキル、職業アイデンティティの 3 因子と関連があった。今後は授業、演習、実習に加えて、ボランティア活動等の社会経験を主体的に促すことで人間関係形成や職業意識をさらに高めていく必要があると示唆された。

キーワード：看護学生，社会的スキル，職業的アイデンティティ，基礎看護学実習，ボランティア活動

Ⅰ. はじめに

他者とのかかわりが基本となる看護師は、対人関係が重要となる職業である。特に、対象のニーズを的確に把握するためのコミュニケーション能力は、他者に対応する上では最も重要である。コミュニケーションを成立させるためには言語的方法と非言語的方法（表情・動作・姿勢等）により、送り手と受け手がお互いの意図を伝達し、理解し合えることが必要である¹⁾。そのため、コミュニケーション能力は「円滑な対人関係を築き、それを保持する個人的能力」とされている社会的スキルとして捉えることが可能である。庄司²⁾は社会的スキルの定義を①学習される、②対人関係の中で展開される、③他者との相互作用の中で個人の目標達成に有効である、④社会的に受容されるとしている。こ

のことから、社会的スキルは単なる技術ではなく、心理社会的能力を含めた能力として扱われ、人間関係の形成に密接にかかわっていると言える。

職業的アイデンティティとは、職業と自己との関連性の中で、職業を通して自分らしさを確かめ、どのように成長していきたいかという自己意識のことである。看護学生の職業的アイデンティティについては、入学直後の 1 年目が最も高く、2 年目で大きく低下し、卒業直前で高くなる傾向がある。実習における達成感が高いことと関連がある等の報告がされている^{3) 4)}。また SNS が普及している現代の若者のコミュニケーションの特徴から、人間関係の形成に必要な社会的スキルの程度と職業的アイデンティティの程度には関連があるのではないかと考え

る。

これまでの研究では、自己効力感と職業的アイデンティティ、社会人基礎力と職業的アイデンティティ、コミュニケーションスキルと自己効力感等の関連については研究がされているが、社会的スキルや職業的アイデンティティを、臨地実習やボランティア活動経験との観点から検討した研究は見当たらない。ボランティア活動は対象にかかわる上でより多くのコミュニケーションを必要とするため、看護学生にとっては社会的スキルを育む動機づけとなると考える。さらに本学看護学科が2016年度より大学に移行したことから、1、2年次配当の基礎看護学実習の現状を把握し、本学の看護基礎教育による看護教育上の示唆を得ることを目的に質問紙調査を行った。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティにおける基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱおよびボランティア活動経験との関連を知ることにより、社会的スキルと職業的アイデンティティの形成における特徴を明らかにすることである。

用語の定義:本研究でのボランティア活動とは、老人保健施設や、様々な施設・団体から依頼された支援活動、地域住民を対象とした健康調査（身長、体重、血圧、握力、骨密度測定、体組成）および保健指導にボランティアとして参加し行う活動のことである。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質問紙調査による量的記述研究デザイン

2. 研究対象者

平成28年度に入学したA大学看護学科学生69名であった。

3. 調査方法

1年次春学期に実施する基礎看護学実習Ⅰ、および2年次秋学期に実施する基礎看護学実習Ⅱの実習前後において自記式質問紙調査を実施した。対象者に研究の趣旨、倫理的配慮について文書および口頭で説明した後、質問紙を配布し記入後にその場で回収、施錠可能な場所で保管した。調査期間は平成28年8月～平成29年12月であった。

1) 基礎看護学実習Ⅰについて

①実習目的と実習内容

実習目的は入院患者の療養生活、日常生活の援助技術、患者・看護師関係の成立等、看護実践に必要な基礎的能力（知識・技術・態度）を修得することである。臨地実習は初めてであり、主な実習内容は、看護活動の見学、日常生活援助技術の参加体験、対象患者とのコミュニケーション、看護師へのインタビューである。

②教育課程における位置づけ

専門教育科目、専門科目・看護の基本、1年次春学期、必修1単位（45時間）。1年次春学期までに以下の科目を修得していることを履修要件とする。

基礎演習、情報処理基礎、日本語リテラシー等の導入教育、健康医療総論、生命と倫理、解剖生理学Ⅰ等の専門基礎科目、看護学概論、日常生活援助論

2) 基礎看護学実習Ⅱについて

①実習目的と実習内容

実習目的は医療施設における患者の療養生活を理解し、日常生活の援助を通して対象に適した看護を実践するための看護過程の展開方法を学ぶことであり、学生は1名の受け持ち患者を担当して看護過程の展開を行う。

②教育課程の位置づけ

専門教育科目、専門科目・看護の基本、2年次秋学期、必修2単位（90時間）。1年次から2年次春学期までに以下の科目を修得していることを履修要件とする。

基礎演習，情報処理基礎，日本語リテラシー，語学，地域文化論等のリベラルアーツ科目，健康医療総論，解剖生理学Ⅰ・Ⅱ，病態学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，薬理学，公衆衛生学等の専門基礎科目，看護学概論，ヘルスアセスメント，看護過程論，看護倫理，成人看護学概論，高齢者看護学概論，医療安全，家族看護論等の専門科目，日常生活援助論，回復促進援助論，基礎看護学実習Ⅰ

4. 調査内容

質問内容は，対象者の属性（年齢，性別），ボランティア活動の経験の有無，臨地実習の達成感，社会的スキル，職業的アイデンティティである。

社会的スキルは，菊池（1988）が作成した「KiSS-18」を使用した。対人関係を円滑に運ぶために役立つスキルの程度を測定する尺度であり，18項目からなる。「いつもそうだ」から「いつもそうでない」の5段階尺度で判定され，それぞれ5点から1点に評点化し，合計点を算出する。得点が高いほど社会的スキルが高いことを示す⁵⁾。合計得点範囲は18～90点であった。

職業的アイデンティティは，藤井・野々村・鈴木他（2002）が作成した「職業的アイデンティティ尺度」を使用した。使用にあたっては作成者の同意を得ている。この尺度の「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「必要とされることへの自負」「社会貢献の志向」の4つの下位尺度の上位5項目，計20項目を使用する。この尺度は「そう思う」から「そう思わない」の7段階尺度で判定され，それぞれ7点から1点に評点化し，平均点を算出する。得点が高いほど職業的アイデンティティが高いことを示す⁶⁾。

5. 分析方法

すべてのデータは数量化し基礎的集計を行った。KiSS-18の18項目および職業的アイデンティティの20項目については信頼性を確認し

た。基礎看護学実習前後の比較はWilcoxonの符号付き順位検定，KiSS-18と職業的アイデンティティとの関連はSpearmanの順位相関係数，ボランティア活動経験と各尺度との関連はMann-Whitney U検定を用いて比較検討した。統計処理はSPSS 23.0 for windowsを使用し，5%未満を有意水準とした。

6. 倫理的配慮

研究対象者に調査の趣旨，匿名性，参加同意の自由，協力拒否の自由，成績評価には影響しないこと等を文書でおよび口頭で説明し，回答の提出でもって同意したことと判断した。本研究は八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た（No.16-06）。

IV. 結果

1. 分析対象者の概要

対象学生69名中，基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱを履修し本研究への同意が得られた学生は62名（男性7名，女性55名）であった。ボランティア活動経験では，基礎看護学実習Ⅰ実習前において有17名（27.4%），無45名（72.6%），基礎看護学実習Ⅱ実習前においては有54名（87.1%），無8名（12.9%）であった。臨地実習達成感では，基礎看護学実習Ⅰにおいて有59名（95.2%），無3名（4.8%），基礎看護学実習Ⅱにおいては有58名（93.5%），無4名（6.4%）であった。

2. KiSS-18と職業的アイデンティティの内的妥当性

KiSS-18の18項目についてCronbach's $\alpha = .882 \sim .921$ であった。職業的アイデンティティの20項目についてCronbach's $\alpha = .937 \sim .960$ であった。4因子のCronbach's α は，「看護職を選択したことへの自負」が.882～.929，「看護観の確立」が.831～.944，「社会貢献の志向」が.880～.908，「必要とされることへの自負」が.870～.949で内的妥当性は高かった。

3. KiSS-18, 職業的アイデンティティの基礎看護学実習前後の比較

1) 基礎看護学実習 I・II 実習前後 (表 1)

基礎看護学実習 I 実習前後の比較では, 職業的アイデンティティの 4 因子のうち「必要とされることへの自負」において実習前より実習後で有意に得点が高かった ($p<.01$)。実習前後ともに「社会貢献の志向」の得点が最も高く, 「必要とされることへの自負」の得点が最も低かった。KiSS-18 では実習前後で有意な差は認め

られなかった。

基礎看護学実習 II 実習前後の比較では, 職業的アイデンティティの 4 因子のうち「社会貢献の志向」において実習前より実習後で有意に得点が低かった ($p<.01$)。実習前後ともに「社会貢献の志向」の得点が最も高く, 「必要とされることへの自負」の得点が最も低かった。KiSS-18 では実習前後で有意な差は認められなかった。

表 1 各尺度と基礎看護学実習 I・II 前後の比較

変数	基礎看護学実習 I			基礎看護学実習 II		
	実習前	実習後	P	実習前	実習後	P
職業的アイデンティティ	$\alpha = .940$			$\alpha = .946$		
看護職を選択したことへの自負	4.9 (4.2~5.6)	4.8 (4.2~5.4)	n.s.	4.8 (4.2~5.2)	4.8 (4.2~5.5)	n.s.
看護観の確立	4.6 (4.2~5.0)	4.8 (4.3~5.2)	n.s.	4.4 (4.0~5.0)	4.6 (4.0~5.2)	n.s.
社会貢献の志向	5.5 (5.0~6.0)	5.5 (5.0~6.0)	n.s.	5.5 (5.0~6.0)	5.2 (4.6~6.0)	**
必要とされることへの自負	4.2 (3.8~4.8)	4.4 (4.0~5.4)	**	4.1 (3.6~4.8)	4.3 (3.9~5.0)	n.s.
KiSS-18	$\alpha = .675$			$\alpha = .882$		
	60.8 (55.0~66.2)	61.2 (58.0~67.0)	n.s.	60.6 (54.0~67.0)	61.4 (57.0~68.0)	n.s.

※ Wilcoxonの符号付き順位検定

** : $P<.01$

2) 基礎看護学実習 I 実習後と基礎看護学実習 II 実習前 (表 2)

実習による影響要因を取り除くため, 1 年次に実施する基礎看護学実習 I の実習後と, 2 年次秋学期に実施する基礎看護学実習 II の実習前との学年間による比較を行った。その結果, 「看護観の確立」「必要とされることへの自負」が 1 年次の基礎看護学実習 I 実習後より 2 年次の基礎看護学実習 II の実習後で有意に得点が低かった ($p<.01$)。

3) KiSS-18 と職業的アイデンティティの関連

基礎看護学実習 I は実習前後ともに, KiSS-18 は, 職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「社会貢献の志向」「必要とされることへの自負」との間で有意な正の相関が認められた ($r=.33\sim.69$, $p<.001\sim.01$) (表 3)。また, 基礎看護学実習

II は実習前後ともに, KiSS-18 は, 職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「社会貢献の志向」「必要とされることへの自負」との間で有意な正の相関が認められた ($r=.44\sim.71$, $p<.001$) (表 4)。

4. ボランティア活動経験と KiSS-18, 職業的アイデンティティとの関連 (表 5)

学年別のボランティア活動経験と KiSS-18, 職業的アイデンティティとの関連を検討するため, 1 年次は基礎看護学実習 I 実習前, 2 年次は基礎看護学実習 II 実習前の時点でのデータを使用した。その結果, 1 年次では有意差は認められなかったが, 2 年次において KiSS-18, 「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「社会貢献の志向」でボランティア経験の有が無より有意に得点が高かった ($p<.05\sim p<.01$)。

表2 各尺度の基礎看護学実習Ⅰ実習後と基礎看護学実習Ⅱ実習前の比較

変数	カテゴリー	median (25~75percentile)		P
		基礎看護学実習Ⅰ 実習後	基礎看護学実習Ⅱ 実習前	
職業的アイデンティティ				
看護職を選択したことへの自負		4.8 (4.2~5.4)	4.8 (4.2~5.2)	n.s.
看護観の確立		4.8 (4.3~5.2)	4.4 (4.0~5.0)	**
社会貢献の志向		5.5 (5.0~6.0)	5.5 (5.0~6.0)	n.s.
必要とされることへの自負		4.4 (4.0~5.4)	4.1 (3.6~4.8)	**
KISS-18		61.2 (58.0~67.0)	60.6 (54.0~67.0)	n.s.

※ Wilcoxonの符号付き順位検定 **：P<.01

表3 基礎看護学実習ⅠにおけるKISS-18と職業的アイデンティティとの関連

変数	r	P
基礎看護学実習Ⅰ 実習前		
職業的アイデンティティ		
看護職を選択したことへの自負	.47	***
看護観の確立	.55	***
社会貢献の志向	.33	**
必要とされることへの自負	.36	**
基礎看護学実習Ⅰ 実習後		
職業的アイデンティティ		
看護職を選択したことへの自負	.46	***
看護観の確立	.69	***
社会貢献の志向	.39	**
必要とされることへの自負	.53	***

※ Spearmanの順位相関係数
※ **：P<.01, ***：P<.001

表4 基礎看護学実習ⅡにおけるKISS-18と職業的アイデンティティとの関連

変数	r	P
基礎看護学実習Ⅱ 実習前		
職業的アイデンティティ		
看護職を選択したことへの自負	.53	***
看護観の確立	.71	***
社会貢献の志向	.52	***
必要とされることへの自負	.44	***
基礎看護学実習Ⅱ 実習後		
職業的アイデンティティ		
看護職を選択したことへの自負	.57	***
看護観の確立	.68	***
社会貢献の志向	.55	***
必要とされることへの自負	.64	***

※ Spearmanの順位相関係数
※ ***：P<.001

表5 2年次におけるボランティア活動経験と各尺度との比較

変数	カテゴリー	median (25~75percentile)		P
		有	無	
職業的アイデンティティ				
看護職を選択したことへの自負		4.8 (4.2~5.4)	4.2 (3.7~4.5)	*
看護観の確立		4.6 (4.0~5.2)	3.6 (3.0~4.1)	**
社会貢献の志向		5.6 (5.0~6.0)	4.8 (4.2~5.6)	*
必要とされることへの自負		4.2 (3.7~4.8)	3.6 (2.7~4.5)	n.s.
KISS-18		61.7 (56.0~68.0)	53.2 (43.5~60.7)	*

※ Mann-WhitneyU検定

※ *：P<.05, **：P<.01

V. 考察

1. 基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ実習前後における職業的アイデンティティと社会的スキル

基礎看護学は専門科目の基盤であり、看護学の基盤・土台となる理論や技術について学習をする学問領域である。看護を学ぶ学生にとって

の導入部分となり、主として1年次と2年次で学ぶ授業が多い。基礎看護学実習Ⅰ実習前後の比較の結果から、1年次は社会へ貢献したいという看護職選択への目的意識はあるが、自分が看護師として必要とされているという手応えは他の3因子と比較し感じにくいことが示唆された。

基礎看護学実習Ⅰの実習内容には看護活動の見学・体験、看護師へのインタビューが含まれている。筆者らの先行研究⁷⁾によると、看護師への質問内容には「看護職を志望した動機・やりがい」が多く、入学間もない学生の職業選択に対する心の揺らぎが見てとれたこと、インタビュー後の心の変化では、看護師が明確な自分の意見を持ち、仕事に誇りを持っていることを感じ取り、憧れの気持ちを抱いたり、本当に看護師になりたいと思えた、人の役に立ちたい等、漠然としていた看護師像をより明確に描き出す機会となっていたことが明らかとなっている。実習前より実習後には「必要とされることへの自負」において有意に得点が高かったことから、基礎看護学実習Ⅰは学生が看護師という職業について理解を深め、看護師として必要とされる存在に成長しようとする意欲を高める機会となると推測された。

学生は臨地実習において看護職のやりがいだけでなく、仕事の大変さ、責任の重さ等を感じたり、患者との信頼関係の構築やコミュニケーションに不安を抱いている⁷⁾とされている。基礎看護学実習Ⅱ実習前より実習後には「社会貢献の志向」において有意に得点が低かったことから、基礎看護学実習Ⅱの初めての受け持ち患者実習によるより専門的な実習での体験が職業的アイデンティティをさらに低下させる原因となったものと考えられる。

また、本研究では基礎看護学実習Ⅰ実習前後、基礎看護学実習Ⅱ実習前後ともに社会的スキルには変化が認められなかった。これは、神戸⁸⁾らの報告を支持するものである。

さらに、臨地実習達成感と社会的スキル、職

業的アイデンティティは標本数に偏りがあり、明らかとならなかったが、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ実習前後ともに、社会的スキルは職業的アイデンティティと関連があったことから、社会的スキルは人間関係の形成に密接にかかわっており、職業的アイデンティティに影響することが示唆された。

2. 学年間で異なる職業的アイデンティティ

「看護観の確立」「必要とされることへの自負」は、1年次(基礎看護学実習Ⅰ実習後)より2年次(基礎看護学実習Ⅱ実習前)において有意に得点が低いという結果であった。この結果は、これまでの先行研究の結果とほぼ同様の傾向であった^{3) 4)}。また看護師に対する憧れや関心という職業選択動機が影響し、職業的アイデンティティは高まると言われている⁹⁾。1年次は、入学して間もない職業選択動機や、基礎看護学実習Ⅰでの体験により職業的アイデンティティが高いが、2年次になり、より専門的な授業を受けることや、基礎看護学実習Ⅰから基礎看護学実習Ⅱまでの臨地実習期間が約1年ぶりとなることから、憧れや関心ではなく看護職を現実的に捉えるようになり、職業的アイデンティティを低下させる原因となったと推察される。

3. ボランティア活動経験による社会的スキルと職業的アイデンティティ

さらに、2年次において、KiSS-18、「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「社会貢献の志向」でボランティア活動経験の有が無より有意に得点が高かった。本学が推奨しているボランティア活動は、他者とコミュニケーションを行い円滑な対人関係を築く能力が求められることから、非言語的コミュニケーション(表情・動作・姿勢等)も必要となる。薄井ら¹⁰⁾は、コミュニケーションは社会関係の中で経験的に身につけている技術であると述べており、社会的スキルは社会経験を積み重ねることにより徐々に形成されていくスキルであると考えら

れる。またそのことで看護職としての意識も高まっていくものと推察される。本研究の結果から、ボランティア活動は看護学生の社会的スキル、職業的アイデンティティに影響することが明らかとなったため、今後は授業、演習、実習に加えて、ボランティア活動等の社会経験を主体的に促すことで人間関係形成や職業意識を高めていく必要があると示唆された。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、教育課程や基礎看護学実習の実習目標・内容が結果に影響を与えた可能性がある。今回は1, 2年次までの学生を対象としたため、今後は、専門領域別実習を履修する3, 4年次の学生を対象に縦断的な調査を行い、1年次から4年次までの看護学生の成長段階との関連を明らかにしていく必要がある。

VI. 結論

本研究の目的は、看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティにおける基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱおよびボランティア活動経験との関連を知ることにより、社会的スキルと職業的アイデンティティの形成における特徴を明らかにすることを目的に質問紙調査を行い、以下の結論が得られた。

1. 基礎看護学実習Ⅰ実習前より実習後には職業的アイデンティティの「必要とされることへの自負」において有意に得点が高く、1年次より2年次には「看護観の確立」「必要とされることへの自負」において有意に得点が低かった。
2. 基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ実習前後ともに社会的スキルには変化が認められなかったが、社会的スキルは職業的アイデンティティと関連があった。
3. 2年次において、ボランティア活動経験は社会的スキル、職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「社会貢献の志向」と関連していた。今後はボランティア活動等の社会経験を主体的に促すこ

とで人間関係形成や職業意識を高めていく必要があると示唆された。

謝辞

本調査にご協力いただいた看護学生の皆様に深く感謝いたします。

本研究は、第37回日本看護科学学会学術集会、第44回日本看護研究学会学術集会において発表したものに加筆修正を加えたものである。

研究助成情報

本研究は、平成28年度～平成29年度学校法人光星学院イノベーションプログラム(基金)研究等補助金の助成を受けたものである。

引用文献

- 1) 志自岐康子, 他: ナーシンググラフィカ 基礎看護学③ 基礎看護技術 第5版, メディカ出版, p.14-23, 2015.
- 2) 庄司一子: 子どもの社会的スキル, 社会的スキルの心理学, 川島書店, p.204, 1995.
- 3) 藤縄理, 水野智子 他: 学生の専門職アイデンティティ確立を援助するための教育についての検討, 埼玉県立大学紀要, 5, 105-110, 2003.
- 4) 柴田和恵, 高橋ゆかり 他: 看護学生の援助規範意識と職業アイデンティティ—1年生入学時と3年生の比較—, 日本看護学会論文集, 看護総合, 39, 78-80.
- 5) 堀 洋道 監修: 心理測定尺度集Ⅱ KiSS-18 (菊池 1988), 170-174, 2009.
- 6) 藤井恭子, 野々村典子 他: 医療系学生における職業的アイデンティティの分析, 茨城県立医療大学紀要, 7, 131-142, 2002.
- 7) 玉懸多恵子, 小沢久美子, 田口千尋: 基礎看護実習における看護師へのインタビュー体験を通じた学生の学び, 第36回日本看護科学学会学術集会講演集, 2016.
- 8) 神戸美輪子, 坂本雅代: 臨地実習前後でみた

学生の社会的スキルの変化(第1報)ー共感性尺度との関連ー, 日本看護研究学会雑誌, 22(3), 241, 1999.

- 9) 松下由美子, 柴田久美子: 新卒看護師の早期退職にかかわる要因の検討ー職業選択動機と入職半年後の環境要因を中心にー, 山梨県立

看護大学紀要, 6, 65-72, 2004.

- 10) 薄井坦子, 新田なつ子: コミュニケーションの技術, 基礎看護技術, 73, 医学書院, 東京, 1999.

執筆者紹介 (所属)

小沢 久美子	八戸学院大学	看護学科	准教授
蛭田 由美	八戸学院大学	看護学科	学科長
下川原 久子	八戸学院大学	看護学科	講師
切明 美保子	八戸学院大学	看護学科	助教
久保 宣子	八戸学院大学	看護学科	助手
古舘 美喜子	八戸学院大学	看護学科	助手
清塚 智明	八戸学院大学	看護学科	助手
日當 ひとみ	八戸学院大学	看護学科	助手